

## フィンランド

庄司 博史

民族社会研究部

キリスト教ルーサー派が大半をしめる北欧では、クリスマスが一年のうちでもっとも大事な祝日である。日本では、サンタクロースやトナカイなど、派手なイメージを抱かれているかもしれない。たしかに商店は最大のかきいれどきだが、イブの日、人びとはいたって敬虔に、そして家族だけで過ごすのが一般的である。バスや市電は早めに切りあげ、町からは人が消える。

フィンランドでは、何日も前から大掃除や菓子づくりで盛りあがった雰囲気はイブの日、頂点を迎える。サウナでさっぱりしたあと、ロウソクのともる墓地や教会をおとずれば、心はもう立派なわか信者である。その日飾ったクリスマスツリーの根元には全員のプレゼントが置かれ、交換を待つばかり。夕食のメインディッシュは大きな豚肉のかたまりである。塩漬け、燻製、オーブンで半日かけて焼いたものなどさまざまだが、主人がおごそかにナイフをいれ家族の皿に分配する。つけあわせにニンジン、ジャガイモ、カブラなどの伝統的なグラタン類、そして自家製の甘いビールも欠かせない。突如サンタに扮した大人があらわれプレゼントを分ける。一瞬の喧騒のあと、残りのクリスマス当日と次の聖ステファンの日は親戚や友人訪問で静かに過ぎてゆく。包装紙とクリスマスツリーの山を残して。

## ペルー

関 雄二

研究戦略センター

ペルーの首都であるリマのクリスマスイブの深夜は、街が大渋滞となる。早く家族のもとに帰って祝いたい人たちが多くいであろうが、それに輪をかけて渋滞を引き起こす理由がある。代父（パドリーノ）から代子（アイハド）への贈り物配りである。

ラテン・アメリカではカトリック信仰が盛んで、それに関連したパドリーノという擬制的親子関係がよくみられる。カトリックでは、実際の誕生以上に、洗礼を信仰の誕生として重視するため、実の親ではない精神的な親、いわゆる代父が洗礼式に立ち会い、以後、代子の成長にとって重要な役割を果たすのである。パドリーノには、親しい友人や親族が選ばれる。

以前、この代子を十数人抱える人望ある親友に付き合っ、イブの夜を過ごしたことがある。プレゼントの量も相当であったが、それ以上に代子の家々を回って、それらを配り歩くのに時間がかかった。各家で代父は歓待され、酒や食事がふるまわれ、すぐには立ち去ることができないからだ。結果として、プレゼントを配り終わるころには、午前零時前ということになる。家に戻り、七面鳥、チョコレート、リンゴのサラダを口にすることは、私もすっかりできあがっていた。

# 世界のクリスマス

## エチオピア

佐藤 廉也

九州大学助教授

もしも株価のように、エチオピアに生存するヒツジの頭数を日変動グラフで追跡することができたとしたら、一瞬のうちに現存頭数が大暴落する日がある。それがエチオピアのクリスマスである。エチオピア全人口のおよそ半数を占めるエチオピア正教徒は、40日余りにおよぶ長いツォム（肉食を絶つ断食の一種）の後、クリスマス前夜から夜通し教会でおこなわれる典礼に参加し、夜が明けると各家庭でヒツジやヤギを屠り、ごちそうを食べて祝う。長い断食の後なのでうれしさも格別にはない。エチオピアのクリスマスは西暦の1月7日で、ロシア正教などいわゆる東方教会系のクリスマスと同じ日付である。ただし暦はユリウス暦とは異なり1年を13カ月で区切る独自のエチオピア暦である。さらにイエスの生誕年に関する解釈の違いから、西暦より紀元は7年半ほど後ろにずれている（現在は1998年）。

一方、南部低地の少数民族地域では高地のエチオピア正教と異なり、20世紀以降にプロテスタントに改宗した人びとが多い。むしろ教義は欧米系の教会経由で異なるが、

西暦1月7日にクリスマスを祝い、ヒツジやヤギを屠ることは共通している。混淆の一例といえるだろう。



カやぶきの教会で礼拝をおこなうマジャンの村

## ルーマニア

新免 光比呂

民族文化研究部

ルーマニアのクリスマスを彩る伝統的な行事は、ピフライムとコリンダである。ピフライムというのはキリスト教の聖史劇の流れをくむ民衆劇で、東方の三博士をモチーフにしながらもさまざまな仮面装束を身にまとった村人が路上で戦いを演じる。他方、コリンダは若者が歌をうたいながら門付けする行事である。幼い子どもたちにも、門付けをしてお菓子などをもらう習慣がある。

伝統的な行事とならんで、この時期の大きな楽しみは豚の屠殺である。春、市場で購入した子豚を1年かけて育て上げ、12月に入ると家先の庭で解体する。まずワラで起こした火で毛を焼き、それから皮をはいていく。尻尾や耳は子どもたちのおやつとなる。傍らで猫や犬がおとなしくおこぼれを待つのがかわいい。肉はクリスマスのご馳走となり、内臓はソーセージなどの保存食になる。都会の集団住宅の谷間の広場でも解体する人がいるのには驚いた。

こうした農村の伝統行事に対して、現在のルーマニアは外国からの影響によるものか、もみの木のクリスマスツリーを立て、それに電球やクッキーなどの飾り物をして祝うという、きわめて月並みな習慣が一般的になってきている。この時期、もみの木の違法に採採する者があとを絶たないのもそのあらわれであろう。ルーマニアのクリスマスもまた、商業主義の波に乗って華やかに繰り上げられる冬のイベントなのである。